

# 自由のともび

JIYU NO TOMOSHIBI

VOL. **81**

2016 September



- 企画展「中江兆民と『三酔人経綸問答』  
—1世紀の時をへて出現した自筆草稿—」
- 企画展記念講演会報告  
「『在伯同胞活動実況大写真帖』が伝えるもの」
- 特別寄稿「選挙権を持つということ」
- 平成28年度 夏休み子ども歴史教室の報告

## 新館長ごあいさつ

本年四月一日、第六代館長に就任いたしました。高知市立自由民権記念館は一九九〇年四月一日の開館ですから、満二六年の日になります。

あらためて設置目的を見てみると「高知市制一〇〇周年の記念施設として、自由民権運動及び土佐の近代に関する資料を広く収集し、保管し、展示して市民の利用に供し、もって教育、学術及び文化の発展に資する」とあります。

このように当館は、まず資料保存利用機関としての役割をしっかりと果たさなければなりません。特にこれからは、代替わりや引越し、風水害だけでなく、いずれ襲来すると言われている南海トラフ巨大地震や大津波から、いかに地域資料を守っていくのが、大きな課題となります。県下の資料保存機関や関係機関と連携しながら取り組んでいくべき課題であると思います。

一方、「自由民権」を冠する館としての情報発信も重要です。特に高知の若い人々に、土佐の自由民権運動は、高知が全国に誇るものだとこのことを知ってほしいと願っています。

当館では、土佐の自由民権運動のスローガンを「自由は土佐の山間より」と「明治第二の改革を希望する」という植木枝盛の言葉で紹介しています。さらに「自由民権」とは何だったのかといえ「近代日本の青春」と表現しています。実は、このフレーズは、一九八一年の高知市夏季大学の井出孫六氏講演「自由民権運動の今日的意義」の中で述べられたものを、使用させていただいたようです。

自由民権運動は言論の力によって何事かを成さん、という運動でありました。われわれ館員も自由民権の歴史と魅力を伝える言葉を、植木枝盛や井出孫六氏に学びながら磨いていかなければならないと考えるものです。

館長 筒井 秀一

企画展

# 中江兆民と『三酔人経綸問答』

## —1世紀の時をへて出現した自筆草稿—

期間 10月8日(土)～12月25日(日)

会場 2階/特別展示室

主催 高知市立自由民権記念館/大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館

※常設展観覧券が必要



『三酔人経綸問答』当館所蔵

新たに発見された中江兆民の名著『三酔人経綸問答』の自筆草稿を、自由民権記念館所蔵資料などとともに展示します。記念講演会では、兆民の推敲の跡をたどりながら、自筆草稿からどのような兆民の姿を読み取ることができると報告します。



フランス留学時代の兆民

### 【中江兆民】

中江兆民は、弘化四(一八四七)年土佐郡山田町(現高知市はりまや町)に土佐藩下級武士の家に生まれました。若くしてフランス学を修め、明治四(一八七二)年フランスへ留

学、自由民権の思想や文学の基礎を築きました。

明治七(一八七四)年帰国、一時官職に就きますが、明治十(一八七七)年に辞職後は在野で活動しています。仏学塾で教育に携わるとともに、雑誌『政理叢談』を発行、ルソーの『社会契約論』を紹介しました。自由民権運動の中では、東洋自由新聞・自由新聞・東雲新聞などに多くの論説を発表し、さらにルソーの思想を『民約訳解』に翻訳して『番町今蘆騒』(ばんちょういまろ)後に『東洋のルソー』といわれるようになりました。

明治二十三(一八九〇)年の第一回衆議院議員選挙で

大阪から当選しましたが、第一回帝国議会において、予算案修正をめぐる「土佐派の裏切り」に憤激し議員を辞職しています。

明治三十四(一九〇一)年がんを宣告され、『一年有半』(いちねんゆうはん)を出版した後、死去しました。

### 【『三酔人経綸問答』】

中江兆民の代表的著作。明治二〇(一八八七)年出版。『洋学紳士』、『東洋豪傑』、『南海先生』の三者が、酒を酌み交わしながら、小国日本がいかにして独立を保持するかなど、日本の針路について議論するという設定。

洋学紳士は理想主義的な民主化を、東洋豪傑は武力による海外進出を主張、南海先生は「恩賜の民権」を「仮復の民権」に近づける努力の必要性を説いています。

いずれも、日本の選択肢を模索していた兆民の分身であると考えられ、今日にも通じる論点を持っています。

### 記念講演会

## 「中江兆民と『三酔人経綸問答』自筆草稿の意義」

講師…谷川恵一氏 国文学研究資料館教授

日時…10月8日(土) 14時～16時

会場…研修室 参加自由

### 講演会に向けて

このたび国文学研究資料館の所蔵となった『三酔人経綸問答』は、従来まったく知られていなかった兆民の自筆草稿であり、兆民がこの著作をどのように書き進めていったかを知ることができる貴重な資料です。

今回の講演では、この草稿について、兆民自筆とされる自由民権記念館蔵の『策論』などとも比較しながら、兆民がこれを書き進めた明治二十(一八八七)年に溯ってわかりやすく紹介します。

(谷川恵一)

当館所蔵『策論』より



国文学研究資料館所蔵『三酔人経綸問答』自筆草稿より

7月16日に開催した、企画展(10月2日まで開催)記念講演会の要旨を掲載します。

# 『在伯同胞活動実況大写真帖』が伝えるもの —— ブラジル日本移民の精神誌

中村 茂生 (高知の移民文化発信プロジェクト事務局)

## ■出版の背景—ブラジル日本移民史

明治四一(一九〇八)年に、佐川町出身の水野龍がブラジルへの日本人移民送出事業を始めてから、第二次世界大戦で途絶するまでのブラジル行移民総数は十八万人を超える。人口増などの課題を抱える当時の日本にとって、ブラジルへの期待は大きかったが、新しい移民先に対応できるようになるまでには、十数年にわたる、犠牲を伴う試行錯誤が必要だった。

大正の終わり頃になって、まず珈琲農園に雇用され、数年間働いたあと、場合によっては自分の土地を持って独立する、というひとつのパターンがほぼ確立し、日本人が開拓し、暮らす土地には、日本人会や学校もあるという環境も次第に整った。先行者から確度の高い情報も入るようになり、国の渡航費補助制度も拡充され、日本人のブラジル行移民は、ここでようやく安定した時期に入ったと見ることができ。

昭和十三(一九三八)年『写真帖』出版時には、約十七万人がブラジルにいた。日本人移民の間には、日



## ■『写真帖』成功の要因

本語新聞も発行されるほどのコミュニティが成立し、日本では考えられないほどの経済的達成を、短期間で成し遂げた「成功者」といえる移民もある程度存在した。『写真帖』購入者となったのは、主にそういった「成功者」であったと思われる。ただし、日本から新しい移民が続々とはいり、数年後にはその中から「成功者」が生まれるという状況は、ブラジル国内での日本人移民排斥の動きが顕著になるまでのわずかな期間に終わる。

『写真帖』は、この短い春の記録といえるかもしれない。日本各地から神戸に集まった家族が、長い航海を経てブラジルに上陸するところから、珈琲農園での労働の

様子、日本人移民コミュニティの繁栄ぶりが描かれ、後半部分では成功した家族がひとつひとつ紹介される。さまざまな要因でブラジルへの移民という選択をした家族が成功するまでの物語が読み取れるような構成になっている。移民の「成功」を謳歌する内容だといってよいだろう。『写真帖』が相当売れたことは、装丁や構成の一部が異なる版が作られていることや、出版後の竹下写真館の隆盛ぶり、ご家族の話などからうかがうことができる。それにはいくつかの要因が考えられる。

『写真帖』を購入する移民の側からすれば、『写真帖』は、自分自身と、自分たちを送り出した故郷の人びとに対する、移民という選択の正しさの証明であった。移民という選択の背景はさまざまだが、経済的要因の占める割合が大きいことは想像できる。だとすれば移民という選択の正しさをはかるひとつの指標は、獲得した財産ということになる。

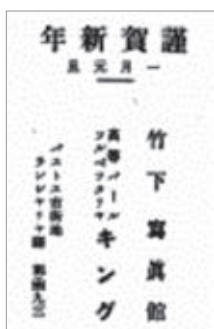
収録されている写真の独特の構図を見れば、単に近況を伝えることが目的でないことは明らかである。小さく写った人物のかわりに画面を占めるのは、広大な農地、家、自動車である。間隔をあけて配置された家族は、まるで土地の広さを表現するために置かれた対象物のようですらある。『写真帖』が表現しているのは、彼らの財産である。そして財産の実在を端的に伝える最も効果的方法として、写真以上のものはなかった。『写真帖』はまた、もうひとつの「成功」の証ともなった。それは「国策」として進められた移民事業である。外交官は、「これはよい参考品になる」とコメント

を残し、大量の『写真帖』を購入したという。彼らにとって政策の正しさを証明するとともに、日本からの移民を促す絶好の「参考品」となったはずである。

『写真帖』の質の高さにも言及すべきだろう。竹下は、コロタイプ印刷で製作するためにわざわざ和歌山県の大正写真工芸所に発注している。大正写真工芸所は、日本で有数の写真印刷所であり、『写真帖』は、戦前ブラジルで発行された移民写真集を質において凌駕している。この点も、『写真帖』の売り上げを後押しする要素であったと思われる。

## ■竹下増次郎研究に期待

戦前のブラジル日本移民史のなかの、そこしかないという時期に企画され、印刷方法にとことんこだわって作られたことを考えると、『写真帖』の編著者である竹下増次郎のある種の勘の鋭さに改めて感心させられる。



竹下写真館の新年広告  
『伯刺西爾時報』  
昭和12(1937)年  
1月1日に掲載

写真家竹下増次郎については、とくに写真師修行時代からブラジル時代の間、まだ詳らかでないことが多い。ひとりの写真家として、あるいはひとりの移民として、今後の研究が進むことを期待したい。

# 選挙権を持つ ということ

—自由民権記念館の展示から  
得たもの

真辺 美佐

今夏の参議院議員選挙より改正公職選挙法が適用され、選挙権を与えられる年齢が20歳から18歳へと引き下げられた。選挙年齢引き下げに対し、賛否両論噴出したなかでの実施となった。反対側の意見としては、まだ知識や経験の少ない若者に選挙権を与えてよいのかというものが、選挙年齢の引き下げは、いずれ成人年齢の引き下げ議論へとつながり、そのことは、年金や社会保障費など義務や責任を負わせることになるが、それだけの若者自立支援体制が今の日本で整えられているのかというものである。賛成側の意見は、欧米諸国の選挙年齢は18歳であり、日本も先進諸国と足並みを揃え、若者の政治参加を促すべきだというものだ。どちらにせよ、日本の国情、若者の環境、経済状況を踏まえた上での議論が十分になされないまま、実施に至ってしまった感拭えない。

ちょうど今から四半世紀前、私が18歳になる少し前に、高知市立自由民権記念館がオープンした。その頃の私は、恥ずかしながら、政治や社会の問題に関心を抱くこともなく、国会や憲法が存在することに何の疑問もなく当たり前のよう受け止め、憲法は国家の基本法であると学校で教わったこと以上のことを学ぼうとも、改めて考えてみようとも思わなかった。民権記念館にも、なんだかオープンした記念館があるみたいだから、一目見てみようかぐらいの軽い気持ちで足を踏み入れただけであった。

館内に入ってみると、自由や権利を繰り返し謡う、聞いたことのない歌が鳴り響いていた(それを民権歌謡と呼ぶことは後で知った)。また映像展示室では植木枝盛や中江兆民など民権家があらん限りの声をあげて、自由や権利を主張する様子を描いた映画が上映されていた。展示室では、それほど熱心に歴史を勉強したわけでもない私でも知っていた言葉——「板垣死すとも自由は死せず」を叫んだとされる、板垣退助遭難事件の際に刺客が用いた短刀が、生々しく展示されていた。そのほか、民権結社第一号となった高知の「立志社」の資料、植木の憲法草案、『自由新聞』など、国会や憲法に関するさまざまな議論があったことを示す資料が展示されていた。また国会が開設された後では、政府の選挙干渉により、政府の方針に異を唱える者が

襲撃対象となり、高知でも多くの死傷者が出たことを伝える資料が展示されていた。

そのような館内の映像や展示資料は、これまでのんびりと生きてきた私にとって、衝撃的で、歴史的事実を身近に感じた初めての経験であった。わずか百年ほど前に、大人だけではなく、ほんの10歳を超えるか超えないかの子どもに至るまで、自由や権利について、ひいては国会や憲法について議論し、それらを歌にして謡い、またそれらを求めて命を賭して闘ったこともあったという事実が圧倒された。

この記念館との出会いがきっかけとなり、私は、日本近代史の研究を志し、研究者となった。高知生まれの私は、帰省するたびに、自宅より先に記念館に立ち寄る。それは館の展示が私の政治や社会への関心の原点であるからでもあり、またそこに、時代を超えたメッセージが込められていると思うからだ。

今の私は、かつて自由民権を求めた

人々ほど真剣に、政治や社会のあり方を考えられているだろうか。政治を政治家に任せきりにしていないだろうか。新聞やテレビ、ネットの情報を鵜呑みにしていないだろうか。見たくない現実から目を背けたり、耳を塞いだりしていないだろうか。生きる権利や自由の保障について、長期的な視野で考えられているだろうか。今は大人になった私たち社会は、若者たちに、憲法や国会、社会を考えるだけの時間や場所を用意しているだろうか。

このように自分なりのメッセージを受け取り、いつも目の前のことに追われる日々を過ごしてしまおう自分を顧み、政治や社会が、実は生活の大部分を左右するものであることを改めて認識する。今回選挙権を得た若い人々をはじめ、一人でも多くの人には、記念館に足を運んで欲しい。そして、記念館には、参政権を持つということの意味を、これからも伝え続けていってほしいと願ってやまない。

(宮内庁書陵部主任研究官)



## 真辺美佐氏プロフィール

1972年、高知県に生まれる。  
2004年、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻修了。博士(人文科学・お茶の水女子大学)。  
その間、国立国会図書館憲政資料室非常勤調査員・早稲田大学大学史資料センター非常勤嘱託を務める。2005年より宮内庁書陵部の研究職員となり、2011年から主任研究官、現在にいたる。宮内庁では、『昭和天皇実録』を執筆し、同書は現在東京書籍から刊行されている。  
また、お茶の水女子大学の非常勤講師や法政大学の非常勤講師も務める。著書に『末広鉄腸研究』(梓出版社/2006年)、『民権派とヨーロッパ世界の邂逅』(小風雅秀・季武嘉也 編『グローバル化のなかの近代日本』有志舎/2015年)などがある。

# 図書室・郷土情報室をご利用ください!

自由民権運動に関する資料を全国的視野で収集し、自由民権運動関係の資料センターをめざすとともに、幅広く郷土資料の収集をすすめ、自由民権運動や土佐近代史の調査・研究活動に貢献すること—当館ではこれを活動の大きな柱に位置づけています。そこで、今回は、図書室をご紹介します。

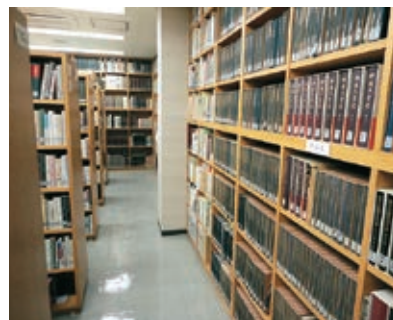
自由民権記念館の2階には、「常設展示室」「民権座」「企画展示室」のほかに、「図書室」があります。図書室の利用は無料で、どなたでもお使いいただけます。事務室とスペースを共用しているため、入室をためらうお客様もいらっしゃいますが、遠慮なくお入りください。図書の館外貸出しはしていませんが、閲覧席でゆっくりとご覧いただけます。職員が図書をお探ししたり、閉架から出してきたりといったお手伝いもいたします。

図書室で閲覧いただける図書は約23,000冊で、自由民権運動をはじめとする近代史についてより深く知りたいという

ご希望にお応えしています。中でも自由民権運動の推進に大きな役割を果たした、さまざまな土佐民権派新聞をコピーし製本したものは、市民図書館・県立図書館にも所蔵

がなく、人気の高い資料です。大掃除をしていて、ふと古い新聞に手を止めて見入ってしまったという経験は誰しもあることでしょう。昔の新聞は、気軽に乗れるタイムマシンのようなもの。ぜひ、手にとってご覧いただきたいと思います。

なお、1階の郷土情報室では、県内の市町村史や高知県の歴史に関する一般図書、子ども向けの歴史の本の閲覧のほか、自由民権運動を紹介するビデオなどをご視聴いただけます。合わせてご利用ください(ビデオをご利用の場合は、1階受付にお声をお掛けください)。



## ■ 利用案内

開館日の午前9時から  
午後5時まで

	図書室(2階)	郷土情報室(1階)
内 容	<ul style="list-style-type: none"> <li>●自由民権運動関連専門図書</li> <li>●近代史を中心とした専門図書</li> <li>●参考図書、個人全集</li> <li>●明治期新聞復刻版 ほか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●県内市町村史、郷土史に関する図書</li> <li>●近代史を中心とした一般図書</li> <li>●子ども向け歴史図書</li> <li>●ビデオコーナー ほか</li> </ul>
利用方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>●無料でどなたでも利用できます。登録は必要ありません。</li> <li>●館外貸出しはしていません。閲覧席をご利用ください。</li> </ul>	

## 収蔵資料の 旅する資料

博物館は展示会のため、互いに資料の貸し借りを行なっています。今年も収蔵資料が各地の博物館で展示されますのでご案内します。

### 「特別展覧会 没後150年 坂本龍馬」

【京都国立博物館】 10月15日(土)～11月27日(日)  
【長崎歴史文化博物館】 12月17日(土)～2月5日(日)

この展示会は「龍馬が亡くなっておよそ150年、改めて龍馬の活動と人間的な魅力を伝える大規模な展覧会」で、「坂本龍馬という人間を通じて幕末という時代を改めて認識していただきたい」というものです。

当館から、仁井田神社より寄託されている「夕顔艦」絵馬を出品します。この絵馬は、土佐藩船「夕顔」の「運用方」が「所願成就」のため奉納したものです。慶応3(1867)年、この船中で、龍馬は後藤象二郎に八つの政策を提案し、倒幕後の日本の進路を示したといわれています。



「夕顔艦」絵馬

### 「普通選挙をめざして —犬養毅・尾崎行雄—」特別展

【衆議院憲政記念館】 11月9日(水)～12月2日(金)

この展示会は、「議会政治実現のため閥族と果敢に戦う一方、政党の腐敗を戒め、普通選挙実現に努めた」犬養毅・尾崎を通じて「議会制度の根幹である『選挙』の意義」を特に若い世代に伝えるものです。

当館からは錦絵「高知県民吏両党の激戦」を出品します。他に高知市民図書館から「板垣」「自由」の泥めんこ、高知市教委から帯屋町遺跡出土、「板垣」「相原」「民」の泥めんこ、そして町の若宮神社から絵馬「自由万歳」が出品されます。



錦絵「高知県民吏両党の激戦」



絵馬「自由万歳」

# 夏休み子ども歴史教室の報告

7月22日(金)、今年で節目の20回目となる恒例の「夏休み子ども歴史教室」を高知市教育研究会社会科部会との共催により、自由民権記念館で開催しました。

この催しは、自由民権運動や郷土の歴史を常設展示室の観覧やクイズ、歌、劇などで楽しく学び、知識を深めてもらおうと始めたものです。当日は、高知市内の小学3年生から中学1年生までの87名が参加し、多いに賑わいました。

運営にご協力いただきました高知市教育研究会社会科部会の先生方、「高知県民謡協会」及び劇団「笛の会」の皆さんありがとうございました。



朝早くから子どもたちの笑顔と元気な声飛び交い、日頃は静かな記念館も、毎年この日は活気に溢れています。受付を済ませて民権ホールに入ると、班別の座席に座り開会式を待ちます。開会式のあと、当館製作の映像「自由民権って、何？」を鑑賞し、先生からの説明をしっかりと聞いたらいよいよクイズラリーのスタートです。



クイズラリーでは、次の5つのチェックポイントがあり、各チェックポイントを通過すると、ラリーマップ

に板垣退助などの民権家スタンプを押してもらうことができます。スタンプを5つ集めたらラリー完了です。各チェックポイントの内容は次のとおりです。

**第1**  
**第2**  
**チェックポイント**

常設展示室の中で、解説を聴いたり展示資料を探したりしてクイズに答えます。簡単な問題やちょっと難しい問題など色々ありましたが、皆一生懸命に挑戦してくれました。

**第3**  
**チェックポイント**

劇団「笛の会」の皆さんによる政談演説会を再現した芝居を観て、クイズに答えます。今年、女性の弁士さんが登場して、女性の投票権について語るなど、子どもたちも当時さながらの迫力ある劇に驚き圧倒されながらも、聴衆の一人となって、大人と一緒に「そうだ！そ

うだ！」とかけ声をかけたり、拍手をしたりして大いに盛り上げてくれました。

**第4**  
**チェックポイント**

明治時代に起こった民権運動に関する事柄や、民権家が経験した様々な場面が描かれている、当時実際に作られた遊ばれていた「民権すごろく」遊びを体験しました。「懇親会」など4種類のセリフを言うところにコマがまわると、元気にセリフを言い、上ガリの「国会」を目指してがんばりました。

**第5**  
**チェックポイント**

「高知県民謡協会」の皆さんの三味線と太鼓の伴奏に合わせて、植木枝盛が作詞した「民権かぞへ歌」を歌います。生伴奏に最初は戸惑っていた子どもたちですが、民謡協会の皆さんのご指導で、先生方と一緒に元気よく歌いきました。

参加者全員がすべてのチェックポイントを通過した後、民権ホールに戻って閉会式が行われ、今年の歴史教室も無事終了しました。子どもたちはとてもマナーが良く、楽しくまじめに取り組んでくれました。皆さん本当にお疲れさまでした。  
(氏原 大)

**出題されたクイズから**

問1 明治時代の高知では色々な名前の新聞がありました。では、当時の高知になかった新聞は、次のうちどれでしょうか？  
① 土佐新聞 ② 高知新聞 ③ 高知子ども新聞

問2 昔の議会は「帝国議会」といいました。今の議会は衆議院と参議院の2つありますが、昔の議会も衆議院ともう1つありました。それは次のうちどれでしょうか？  
① 平等院 ② 国民院 ③ 貴族院

**民権かぞへ歌**  
(植木枝盛作) 一部のご紹介

一つとせ 人の上には人はなき  
権利にはかりがないからは  
この人じやもの  
二つとせ 二つとはない我が命  
捨てても自由がないからは  
この惜しみやせぬ  
三つとせ 民権自由の世の中に  
また目のさめない人がある  
このあはれさよ  
四つとせ 世の開けゆく其早やさ  
親が子供に教へられ  
この気をつけよ  
五つとせ 五つに分れし五大州  
中にも亜細亜は半開か  
この恥かしや  
(全部で20番まであります)

# 昭和最初の横綱・玉錦



高知県出身で唯一の横綱である玉錦三右衛門のゆかりの品々を展示中です。元は高知市立昭和小学校に保管されていたものです。

**場所** 2階 常設展示室2  
**期間** 2017(平成29)年2月末まで(予定)

## ●横綱・玉錦とは

第三二代横綱・玉錦は、一九〇三(明治三六)年一月二日に高知市農人町で生まれました。本名は西内弥寿喜。高知市立第五尋常小学校(現高知市立昭和小学校)卒業後、一九一七(大正六)年に二所ノ関部屋に入門します。

入門当初は体重が規定に足りませんでした。努力し、一九一九(大正八)年一月の春場所まで玉錦として初土俵を踏みます。「ボロ錦」といわれるほど生傷の絶えない猛稽古に明け暮れ、一九二五(大正一四)年一月場所まで十両昇進、翌年一月場所には土佐出身第十号の幕内力士となります。

その後、一九二八(昭和三年)一月場所まで小結、五月場所まで関脇、一九三〇(昭和五年)五月場所まで大関と順調に出世し、一九三三(昭和八)年一月場所では、昭和になって初めての横綱となります。

全盛期の体格は、身長五尺三寸(一七三センチ)、体重三七貫(二三九キロ)。得意の右四つ(右腕を相手の左腕

の下に差し廻しを取る形)から、自慢の太鼓腹をおおって一気に土俵を走る速攻の寄りは、「怒涛の寄り」と呼ばれました。

一九三八(昭和一三)年末、盲腸炎を発病し、現役の横綱のまま三四歳で生涯を閉じました。現在より本場所数の少ない当時で幕内優勝九回の名横綱でした。お墓は香南市香我美町岸本にあります。

なお、高知県出身で行司の最高位である立行司になった第二九代木村庄之助こと櫻井春芳さんは、香南市香我美町岸本出身で、玉錦と同じ二所ノ関部屋に所属していました。何か不思議な縁を感じます。高知県出身の立行司も現在までこの方一人です。

## ●横綱

大相撲の横綱だけが腰に締めることができる白い麻布製の綱です。芯に銅線の入った三本の小縄を撻り合わせて、両端を細く、中央が太くなるように作っています。現在は東京で本場所(一月の

初場所・五月の夏場所・九月の秋場所の計三回)が行われることに新しい綱が作られています。

明治時代中頃までの相撲では、大関が番付の最高位でした。大関の中でこの綱を着けることのできる強い者を、この綱の呼称にちなんで「横綱」と呼んでいました。現在の相撲の大相撲の横綱の称号はこの綱に由来しています。

横綱の土俵入りの型は雲竜型と不知火型の二種類ありますが、玉錦は雲竜型でした。雲竜型は、土俵でせり上げるときに、左手を脇腹に当て右手を伸ばします。横綱は背中側で輪を一つ作るように結びます。一方、不知火型は、両手を左右に伸ばしてせり上がり、横綱の輪も二つになります。また、輪を二つ作るため、綱の長さは不知火型のものの方が一般的に長くなります。玉錦は土俵入りの姿の美しさから、「動く錦絵」とも評され人気を集めました。

現在の横綱では、第六九代白鵬関(宮城野部屋所属)と第七〇代日馬富士関(伊勢ヶ濱部屋所属)が不知火型で、第七一代鶴竜関(井筒部屋所属)が雲竜型です。歴史的には、大多数の横綱が雲竜型で土俵入りをしています。

## ●明け荷

関取と呼ばれる十枚目(十両)とも呼ばれますが、これは通称です。以上の地

位の力士が持つことが許されたつづら(荷物入れ)です。十枚目以上の行司も持つことができますが、力士のものよりやや小振りです。

竹で編んだ上に丈夫な和紙をはり、さらに漆や漆などを塗って固めています。蓋に朱色で四股名(力士の名前)が書かれます。十両に昇進したときに入門同期生や後援者から贈られます。この中に廻しや浴衣・小物類などを入れて、付人である幕下以下の力士が運びます。原則一人一つですが、横綱のみ三つまで持つことが認められています。その他、部屋付きの行司のものと思われる軍配も展示しています。

高知県出身の最近の力士としては、室戸市出身で元大関朝潮の現高砂親方、いの町出身でタレントとしても活躍した元関脇の荒瀬さん、安芸市出身で元関脇土佐ノ海の立川親方、現役では宿毛市出身の豊ノ島関(時津風部屋所属)、立川親方と同じ安芸市出身の柊畑山関(春日野部屋所属)らがいます。

郷土が生んだ横綱は、もう一人明德義塾高校出身で、現高砂親方が育てた、モンゴル生まれの朝青龍明德さんがいますが、高知県生まれの二人目の横綱の誕生を期待したいと思います。



展示資料(右が横綱、左上が明け荷)

# 行事予定 (秋・冬)

予定は変更になる場合があります。  
詳しくは自由民権記念館までお問い合わせください。



開催中～10月2日(日)

■企画展『『在伯同胞活動実況大写真帖』  
—竹下増次郎、ブラジル日本移民を写す』  
会場:2階特別展示室

10月8日(土)～12月25日(日)

■企画展『中江兆民と『三酔人経綸問答』  
—1世紀の時をへて出現した自筆草稿—』  
会場:2階特別展示室

10月8日(土)14:00～16:00

■企画展記念講演会  
「中江兆民と『三酔人経綸問答』  
自筆草稿の意義」

講師:谷川恵一氏(国文学研究資料館教授)  
会場:研修室



晩年の中江兆民

10月15日(土)14:00～16:00(受付13:30～)

◆友の会第16回「県詞の日」記念講演会  
「日本のメディアの現状を問う  
～『言論の自由』をジャーナリズム  
の役割から考える～」

講師:高田昌幸氏(高知新聞記者)  
会場:研修室

◆は当館内友の会事務局にお問い合わせください。

11月26日(土)9:00～15:00  
8:45 当館集合・受付

要申込

## ◆民権史跡めぐり

コース:潮江地区史跡(要法寺など)→天神  
橋商店街界隈史跡→第四小学校正  
門前→高知城→中央公園→九反田  
公園→丸山台等(途中昼食)〈予定〉

解説:丸山和代氏  
(高知市学校教育課主査・元当館学芸係)  
参加費:3,000円程度(バス代・昼食代・保険  
他含む。参加人数により変動)

※参加申し込みは友の会事務局まで  
(9月15日(休)から受付開始/定員25名に  
達し次第締め切り)  
雨天決行(暴風雨なら中止)

11月26日(土)15:00～17:00

■高知近代史研究会第88回研究会  
薩長同盟・幕長戦争150年共同企画  
「薩長盟約の実態  
—英雄史観からの脱却—」

報告者:家近良樹氏(大阪経済大学教授)  
会場:民権ホール  
共催:高知県立坂本龍馬記念館  
北川村立中岡慎太郎館

12月10日(土)10:00

## ◆「兆民忌」

筆山にある中江家の墓参り  
集合場所:高知市筆山登り口

12月23日(金・祝)13:30～

要申込

## ◆第20回 民権風まつり 土佐風を作ろう

会場:自由ギャラリー

1月4日(水)14:00～

◆土佐風を揚げよう  
場所:鏡川北岸  
トリム公園



1月21日(土)～2月23日(木)

■第17回 社会科自由研究作品展  
市内小中学生の社会科に関する  
研究作品を展示

会場:自由ギャラリー

1月23日(月)10:00

## ◆「無天忌」

植木枝盛の命日に墓所の清掃と墓参り  
集合場所:高知市小高坂市民会館

3月4日(土)～9月24日(日)

■企画展「龍馬の一代記  
『汗血千里の駒』」

会場:2階特別展示室



新撰組に対し、応戦する龍馬たち

この企画展は「志国高知 幕末維新博～  
時代は土佐の山間より～」の行事とし  
て開催します。



3月中旬予定

■高知近代史研究会第89回研究会  
テーマ 未定  
会場:未定



## 民権資料出土



## 「板垣」「相原」「民」の泥めんこ

2015(平成27)年冬に、高知市教育委員会が発掘調査を行った帯屋町遺跡(高知市本町4丁目)では、土佐藩の筆頭家老である深尾家の屋敷地内に掘られた明治のごみ穴から、自由民権運動の息吹を伝える泥めんこが出土しました。泥めんこは、おはじきのような遊び方をしたと考えられている江戸時代からの土器製の玩具です。

「板垣」は「板垣退助」、「相原」は岐阜で板垣を短刀で襲った「相原(あいはら)尚襲(なおぶみ)」、「民」は自由民権の「民」と思われ、当時の世相が子どもの玩具にも映し出されています。